令和５年度第１回
高知県ひきこもりの人等に対する支援のあり方に関する検討委員会　議事概要

日時：令和５年９月４日（月）18：00～20：00
場所：高知共済会館
出席委員：13 名（別添「出席者名簿」のとおり）
事 務 局：25 名（別添「出席者名簿」のとおり）

議　　事：
１．　開会
２．　議事
（１）国の動向、県の取組状況について
（２）市町村における精神保健に関する相談支援体制の整備について
（３）市町村、ブロック域、県域における取組と課題
（４）協議：課題等を踏まえた今後の方向性について
３．　閉会

【１．　開会】
・開会挨拶（子ども・福祉政策部長）

【２．　議事】
（１）国の動向、県の取組状況について
■説明
・地域福祉政策課
・生涯学習課

（２）市町村における精神保健に関する相談支援体制の整備について
■説明
・障害保健支援課

●委員
・市町村における精神保健に関する相談支援体制の整備について、どうやって具体的に実効性を高めていけるか。そこの部分を具体化しないと、市町村でもどこをどういうふうにしたらいいか分からないということもある。
・市町村への支援に関する都道府県の責務とあるが、なにか具体的な方針があれば

教えてほしい。

■事務局（障害保健支援課）

・市町村でも専門性と言えるかどうか分からないが、精神保健に関する部分については対応できているところもある。今回の法改正については法律が後から追いついてきたという部分もあるという認識。

・ただ国が考えているのは、おそらく様々な相談事の背景に精神保健に関する課題を抱えている方が多くいること、またそういったことにまずその最前線である市町村でその方々の精神的な課題について気づくことが大事というところ。そういった気づいてキャッチした方々を支援をしていく中で、県も福祉保健所であるとか精神保健福祉センターが専門的な視点を持ってフォローしていくと認識している。

・国でも市町村の精神保健に関する体制整備のあり方を検討しているようで、検討結果を踏まえて、県でどういったことが必要なのか考えていきたい。

●委員長

・ひきこもりをはじめ、精神保健の問題を市町村中心でと国の方針があるが、たとえば医療機関だったり社会福祉協議会であったり精神保健を市町村で、というイメージがつくかというところを委員へ聞きたい。

●委員

・これまでであれば、そんなにイメージができなかったのが正直な意見。どちらかというと、色々な相談窓口に行ったけれども、とりあえず病院にという流れで、病院を受診されていたと思う。

・ひきこもりの方にしても、本人が求めてくる関わりの量とか質に応じて個別に対応していく必要があり、その点は医療で関わろうが市町村で関わろうが同じだと感じる。

・しかし、本人が求められたものに添った量とか質を、医療機関だけで関わっていくというのが非常に難しいと感じている。医療を求めているのであれば医療を提供しないといけないし、相談を求めているのであれば相談、就労を求めているのであれば就労とかそこが非常に重要なところ。

・医療機関は、病気や治療がないとどうしても関わりが終わってしまう。そこで市町村とか就労とか、本人が求めているものに添った関わりができるように横のつながりができていければ、非常に支援がやりやすくのではと考える。

●委員

・社会福祉協議会では、個人のアセスメントをする中で、精神保健上の課題が見え

てきた場合は、精神保健福祉センターや高知市へ相談しながら、必要であればつなぐなど対応している。

・社会福祉協議会は診断ができないため、疑いの段階で柔軟に対応してもらえると助かる。

（３）市町村、ブロック域、県域における取組と課題

■説明

・須崎市健康推進課

・須崎福祉保健所

・ひきこもり地域支援センター

●委員

・障害者就業・生活支援センターの関わりはどのようなものがあるのか。

■事務局（障害保健支援課）

・県内５箇所に障害者就業・生活支援センターを設置しており、須崎市にもある。

●委員長

・私から補足する。もちろん障害者就業・生活支援センターでもひきこもりの方々の支援を行っており、研修会にも参加いただいている。ひきこもりの支援は様々な観点から取り組んでいく必要があるので、就業面や生活面の支援として関わっている。

●委員

・もう一点質問する。インターネットやIT活用は検討しているか。というのも、不登校のお子さんや学校で孤立して、家族とも関係が悪くなりSNS等を通じて県外の成人等とトラブルに巻き込まれるケースがある。そういったケースを見ていると、しっかりとした身近な人間関係の重要性を感じる。一方、ひきこもっていたり、孤立していると支援に繋がりにくいので、SNS等を利用している子どもたちに対応する何か取組や今後の方向性があれば教えてほしい。

●委員長

・SNSの利用や子どもたちへの支援について、心の教育センターにも参加してもらっているので、そのあたりの取組をお話いただきたい。

●委員

・心の教育センターはいじめや不登校など教育に関する相談を一元的に受けている機関。

・子どもたちの不登校の要因・背景は多様化している。さきほどの話のとおり、身近な人間関係が重要だと認識しており、支援したくても、家庭から出られない状態になっている子どもたちやその保護者に対してどうやって支援していくか、つながっていくのかということが大きな課題になっている。また、不登校の児童生徒の数自体は、年々増加傾向にあることはご存知かと思う。

・不登校支援・対策として教育委員会として新たに有識者会議を立ち上げており、来年度以降、県の不登校施策をどうしていくか意見を聞きながら検討しているところ。

・今年度は現時点で２回開催しており、不登校児童生徒の多様な教育確保に関する協議会として、学びの環境や子どもたちの居場所確保を重点に協議を進めている。SNS については、まだ具体的な議論まで至っていないが、不登校の直接要因としてのネット依存や、不登校の状態の児童生徒がその後にネットでトラブルに巻き込まれるケースもあることを認識している。

・ひきこもりの方に対する支援体制と県の教育委員会で進めている不登校対策とそれらがうまく連動していければと感じた。

●委員長

・須崎市の報告に戻るが、例えば市町村プラットフォームの構築についてなかなか進んでいないという説明があったが、これはカタチだけのプラットフォームをつくるのではなく、市町村プラットフォームの中身について熱心に皆で検討している、考えているということか。

■須崎市

・どのような温度で設置するのか、誰とどう話し合って決めたら良いのかが分からない。須崎市はひきこもり支援を保健師がやってきた経緯もあり、須崎市でこうやっていく、という共通認識が必要と感じる。

●委員長

・須崎福祉保健所に聞くが、市町村でひきこもり支援について違いを感じるか。

■須崎福祉保健所

・福祉保健所では、ひきこもり支援担当が市町村の検討会に出席している。（市町村のひきこもり支援について）保健師が中心にはなるが、福祉職や関係者、ひきこ

もり地域支援センターも含めて協議を行っている。直接支援にはならなくても、市町村では一人ひとりの状況を支援者間で共有していると感じている。

（４）協議：課題等を踏まえた今後の方向性について

●委員長

・須崎福祉保健所、ひきこもり地域支援センターからの報告にあったように、今後市町村を中心としたひきこもり支援というのが国も進めているところで、私も国の色んな委員会に出ていって、市町村支援のあり方についてにどうしたらいいか聞かれたりすることもあるが、高知県はこれから市町村が取り組んでいく中での課題とかニーズ、また各関係機関からこんな取組を生み出したいとか意見等もらいながら、今後の方向性について、特に市町村を中心としたひきこもりの方への相談支援体制、また居場所や人づくりというようなところを各市町村を中心として進めていきたい。

・市町村中心としてということで、さきほどのひきこもり地域支援センターからの報告にもあったように、実際の相談の８割が高知市内在住の方というところで、中核市におけるひきこもり地域支援センターの設置について国の担当者から聞かれたりするが、これから高知市としてひきこもり支援どうしていくのか、また現在ひきこもり支援の対応をどのようにしているのか、伺いたい。

●委員

・高知市ではひきこもり地域支援センターといったひきこもりに特化した窓口は設置していないが、包括的支援体制をとっており、世帯全体が非常に複合的な課題を抱えているというケースが増えているので、どの部署が相談を受けても必ず必要な支援につなぐというような体制をとっているところ。子ども支援担当部署がひきこもりの方を見つけることもあるし、高齢者支援部署が実際には８０５０というような形で、ひきこもりの方の支援に入るという場合もある。

・ひきこもりの支援に関しては、専門的な知識がない支援者もいるので、包括的な支援体制の中で支援会議を開きながら、専門知識のある支援者のアドバイス等ももらうなど、支援力の強化というのを今後はかっていくことが課題であると認識している。

●委員長

・実際ひきこもりの相談はどの程度高知市にきているのか。

●委員

・令和４年度に支援会議で支援にあたったというケースは４件。また見えない部分というのもあると思うので、そこにいかに気付けるかというところは課題。また、

不登校と関係しているということも多く聞かれるので、今年度から教育委員会との連携というのも図ってきているところ。教育と福祉の連携も強化しながら、いかに早く気付けるかも今後課題となると考える。

●委員長

・高知市の住民の方が、ひきこもりの支援をしたいと相談した場合に相談窓口はどこになるのか。

●委員

・実際にひきこもりの支援に特化した窓口はないが、地域共生社会推進課でもそういった相談を受ける場合もある。各窓口で話が出た場合には、支援会議につなぐということを決定しているところであり、相談はどこでも受けており、各薬局等でほおっちょけん相談窓口も設置をしながら、どういった相談があっても支援につなげるという体制は取っているところ。

●委員長

・市町村を中心としてこれから動いていくが、そのほかに意見はあるか。

●委員

・高知労働局職業対策課で主には就労支援を実施。出先機関としてはハローワーク。ひきこもりの方専門の窓口というのはないが、本人の属性によって、例えば障害があれば障害窓口で対応したりとか、年齢的に就職氷河期の方であれば就職氷河期の窓口に来てもらったり、生活に困窮している方であれば生活困窮窓口に来てもらったりとか、本人の属性によってそれぞれの窓口に来てもらい、支援を行っていく形。属性が重複していたら本人に選んでもらい、一つの窓口が他の窓口と協力し合って支援している。

・ハローワークには本人やご家族からのほか、若者サポートステーションや市福祉事務所、社会福祉協議会から紹介がある。支援機関からの紹介であれば、その方の状況を把握してもらっているので、本人の了承のもと、事業所に相談したり、助成制度、トライアル雇用の活用を紹介することができるが、保護者や家族の方からの相談の場合は、本人の状況か分からないことがあるため、支援が難しいところもある。ハローワークはアウトリーチ型ということはしていないため、若者サポートステーションや市福祉事務所、社会福祉協議会からの紹介で支援するケースが主。市町村でも、就労希望とか、少しでもアルバイトしたいとかそういった要望があればハローワークを利用してもらえればありがたい。

●委員長

・市町村でひきこもり支援を検討する場合、ハローワークに繋がるのは若者サポートステーション、市福祉事務所、社会福祉協議会など就労支援とか社会的な経済的な自立というようなところを目指す方になってくるので、そのあたりを市町村で話し合いながらハローワークを利用する方はつないでいる思うが、須崎市に尋ねる。

■須崎市

・その通り。また、ハローワークに自ら行って相談できる方は、あまりひきこもりの検討会には挙がらないかと思う。ただ、ひきこもり状態にならないために、仕事だけはつながっていて、その仕事がプツッと切れてしまった時にひきこもりになる方もいる。そういった場合、医療的支援が入ることで回復し、また再度就労を希望される際などにハローワークを利用することはある。

・さきほど若者サポートステーションが社会的、経済的なところで若者支援をしているといっていたが、そこにもつながっていない方がいる場合は、市町村窓口等につないでもらうことも一つお願いしたい。

●委員長

・仕事に就いてた方が色んな背景で仕事がうまくいかなくなり、ハローワークを利用するがなかなかつながらない、そこでひきこもり支援の方に入ってこられる方もいる。まさにそういった病気、障害でもない、なかなか難しいところを市町村で精神保健の観点から受け止めていくというのがとても大事なところと考える。

・既存の就労支援でスムーズに進む場合は少なく、行きつ戻りつ、やってみたけどうまくいかない。その中でハローワークに行って仕事を見つける、という場合もあるという多機関連携が望まれるところ。

・民生委員の方は古くから色々な支援をしており、市町村の中でも重要な役割を担っている方もいるが、これからの市町村でのひきこもり支援に関して、住民の様々なこころの悩み等も含めて支援されている立場で意見を伺いたい。

●委員

・先ほど高知市の方が相談する窓口について話があったが、気になる人、ひきこもり状態かなと思われる方がいた時は、地区の地域包括支援センターに話をしたことがある。何でも相談に乗ってくれる。場合によっては高知市社会福祉協議会にもコーディネーターがいるので相談する。委員長が言われたように、わかりやすい名称の窓口があればいいなというのは感じる。

・私たちも高齢者のところに行って、実は息子がいたとか 8050 の事はよく聞くし、親が高齢になり病気となった後、その子どもが生活に困ってるということは本当に

よく聞く。
・また、40～50 代ぐらいの独居の男性で、いろんな事情で仕事を続けることができず、生活困窮となるケースも聞く。

●委員長
・地域包括支援センターの話が出たが、日本は高齢者の支援を中心として福祉が動いてきて、全国各市町村の地域包括支援センターが一番相談しやすい窓口というところもある。精神障害、精神保健に課題がある方も相談できる体制を、日本は精神障害にも対応した地域包括ケアシステムという形で動いているところ。
・もちろん高齢者支援は非常に大切であり、精神障害の方も大切なところで、それを教えてもらったのは 8050 問題。高齢者に関わるところから発信し、高齢者だけではなく、障害者などの相談できるところも必要であり、そこにひきこもりの方、医療にもかかってないけど支援が必要な方が浮かび上がってきたところかと思う。

●委員
・ケアマネジャーの立場から申し上げると、ケアマネジャーは必ず家の中に訪問する仕事。主に高齢者が担当ではあるが、介護者の介護力に課題があるかなとか、介護者（本人の子など）の異変に気づける職種だと感じる。つまり、高齢者の担当をしながら､その家族になにか異変がないかという家族支援も重要な視点ではと思う。そういったことを踏まえると、今後の課題は、高齢者である本人の支援だけでなく、家族まるごとでアウトリーチ支援ができたらと感じた。
・また、ひきこもりの方や、生きづらさがあり、ひきこもらざるを得なかった本人たちの居場所づくりが大切だと感じており、本日の説明でも居場所づくりなどの取組もされていると聞いたので、地域にはそういった人がいるということをみんなが認めていける社会、社会とつながって社会から認められるということが生きやすさにつながるのではと感じる。

●委員長
・8050 は高齢者だけでなく、精神保健福祉の立場でも色んな機関が各市町村でつながっていかなければいけないと思うが、市町村支援について伺う。

●委員
・ソーシャルワーカーの立場として、普段のひきこもり支援について、病院など医療機関でできることは非常に少ないなといつも感じてる。本人が来てくれていれば関わる機会もあるが、それが困難な場合も多い。家族のみで関わっているというのも多いので、関わり方を日々悩んでいるところ。

・病院から各機関に相談していく時に、相談機関は増加していると思うが、専門職の私たちがその機関に相談してもあちこち転々として、結局最初の相談機関に戻ってくるといったことがあり、これではソーシャルワーカーを経由せずに直接相談した方も同じような状況になるのではと感じる。そういったところで、本日の資料にもあったとおり、包括的な支援体制、断らない窓口に非常に期待している。縦割ではなく、横断的にマネジメントしてくれる人、そういったところ期待している。また、縦糸と横糸という網の目のようにしてこぼれ落ちる人がない支援をということを見たが、それでもこぼれ落ちる人がいると思っている。そういった人たちに目を向けていくのが私たちソーシャルワーカーの役割と感じている。

●委員長

・これからの市町村を中心とした居場所づくりについて伺いたい。

●委員

・ピアサポートセンターのアウトリーチでは、心の中の鎧をどうやって下ろしてもらえるか。それはもう同じ経験をした仲間じゃないかというスタイルでいく。それでも当事者に会えない場合は、家族支援に立ち返る。県内で地域の家族会を立ち上げたい、協力してほしいと言われることもある。あまり早く地域家族会を立ち上げようとすると、その地域の親たちもしんどくなるため、当事者のピアサポーターを派遣したり、その会に家族会の会長として参加することもある。経験者や家族の声を聞くことで、当事者目線、当事者の本当の本音のニーズに近づけるんじゃないかと思う。

・また、北海道では 8050 を通り越して、親が亡くなった当事者たちの支え合いのための連絡会議というのが立ち上がったようだ。家族会の中ではそこまで状況が進みつつある。

・まだまだ分からないことの方がいっぱいあり、いろいろと聞きながら教えてもらいながら、特に当事者にどうしたらいいかと考えながらずっとやっているところ。

●副委員長

・臨床心理士は、スクールカウンセラー、医療関係などで仕事をしている。悩みを聞くということが一般的に思われるかもしれないが、先ほど話があったように、寄り添っていくということを前提とした視点を持っている。

・先ほど専門的な知識が必要だと言われてたと思うが、ひきこもりに関しては、あなたたちの気持ちを分かろうとしているんだよ、という姿勢があれば、色んな方法でも伝わっていくかもしれない。

・「ひきこもり」という言葉でちょっとつまづいてる方がいるかもしれない。それも

気にしながらこの事業をしなければならないのかなと。何かそれをプラスに考えるような表現を、一緒に考えていくような事を含めて、この事業をやっていくことにより、理解が深まり広がっていくんじゃないかと感じる。

【３．　開会】